

「孤獨」の詩人

——ヨーロッパにおける古典詩歌受容における一つの形態——

住 谷 孝 之

ドイツの詩人・作家であるハンス・ベトゲ (Hans Bethge 1876—1946) の詩集に『中國の笛 (支那の笛) —— 中國敘情詩による模倣作』(1907) という作品がある。これは、李白ら中國の詩人たちの詩をもとにして書かれた詩集である。この詩集は、ドイツの作曲家グスタフ・マーラーが交響曲『大地の歌』の作曲にあたり、歌詞として用いたことで大變有名である。ところで『大地の歌』ほどには有名ではないが、マーラーに影響を受けて、彼よりやや後の世代の作曲家たちも、ベトゲのこの詩集をもとにいくつかの作品を作曲している。その一人に、二十世紀を代表するオーストリアの作曲家、アントン・ヴェーベルン (Anton Webern 1885—1945) がいる。この小論では、ヴェーベルンの作品に用いられたベトゲの詩を取り上げ、これまで等閑視されてきたと思われるその原作者

と原詩が誰のどの作品であるか指摘してみたい。⁽¹⁾ それは、當時のヨーロッパにおける中國古典詩歌の受容のあり方を考える一つの材料となるからである。

ところで、原作者と原詩を指摘すると述べたが、ベトゲのこの詩集に收められている詩のいくつかは、中國の誰のどの詩にもとづいているのか、從來必ずしも明確にされずにいたままだった。なぜそのような事態が起こったのか。その大きな理由は、この詩集の制作事情による。實は『中國の笛』は、ベトゲが中國語の原典から直接翻譯したものではない。中國語に不案内であったベトゲは、當時存在していたハンス・ハイルマン (Hans Heilmann) によるドイツ語譯『中國の敘情詩』(1905) を参照し、それに彼自身が獨自の解釋と改變を

加えてこの詩集を著したのである。さらにハイルマンのドイツ語も、中國語の原典を参照したのではない。それ以前にフランス語に翻譯されていた二つの中國詩集、エルヴェ・サン・デニ (Hervey Saint-Denis) 侯爵の『唐詩』(1862) とジュディット・ゴティエの『玉書』(1867) を参照してドイツ語に翻譯しなおしたものである。⁽²⁾ このような複雑な翻譯課程の中で、當然のことながら、時に原詩の誤譯・誤解、さらには原作者の名前の誤りさえもが生じる結果になったのである。その上にベトゲが彼自身の解釋を加えたり、詩の型式の改變を行ったりしたため、中には原詩から大きく逸脱した詩さえも存在するのである。實際、有名なマラーの《大地の歌》でさえも、そこに用いられた詩の中には、長らくその原詩が明らかにされずにいたものがあるぐらいである。⁽³⁾

ヴェーベルンがベトゲの詩にもとづいて作曲した歌曲とは、以下の三曲である。以下にその歌詞と日本語譯(深田甫譯)を紹介する。

- ① 4つの歌曲(聲とピアノによる) 作品12 (1915-1917)
より 第2曲「神祕の笛」(原作者: Li-Tai-Po)

「孤獨」の詩人(住倉)

Die geheimnisvolle Flöte

An einem Abend, da die Blumen dufteten
Und alle Blätter an den Bäumen, trug der Wind
mir

Das Lied einer entfernten Flöte zu. Da schnitt
Ich einen Weidenzweig vom Strauche, und
Mein Lied flog, Antwort gebend, durch die
blühende Nacht.

Seit jenem Abend hören, wenn die Erde schläft,
Die Vögel ein Gespräch in ihrer Sprache.

神祕の笛

夕べとはなりぬ、花の香、木の葉の香
あたりに馨しく漂えば、

風われに遠き國の笛の歌はこびきぬ。

繁みより柳の枝ひともと手折らば

わが歌は返事をのせ 花咲く夜わをば翔めきぬ。

あの世ありてのち 大地の眠りにつく夜ごと聞こゆ

中國文學研究 第二十九期

鳥たち鳥たちのことばにて語らうが。

- ② 4つの歌曲（聲とオーケストラによる）作品13（1914—1918）より 第2曲「孤獨」（原作者：Wang-Seng-Yu）

Die Einsame

An dunkelblauen Himmel steht der Mond.
Ich habe meine Lampe ausgelöscht,
Schwer von Gedanken ist mein einsam Herz.

Ich weine, weine; meine armen Tränen
Rinnen so heiß und bitter von den Wangen,
Weil du so fern bist meiner großen Sehnsucht,
Weil du es nie begreifen wirst,
Wie weh mir ist, wenn ich nicht bei dir bin.

孤獨

群青の天空に月はかかりぬ。
われ燈火を消したれば—
孤獨な胸、重き想いに塞がれぬ

慟哭つのれば、哀れ、わが涙
熱く苦く頬より滴り落つ。

わが深き憧憬から御身遠く離れていれはなり、
わが想いの深きを御身の手に触れねばなり、
御身のもとに在らざれば、痛ましきかな、この身は！

- ③ 同第3曲「異郷の地にて」（原作者：Li-Tai-Po）

In der Fremde

In fremdem Lande lag ich. Weißen Glanz
Malte der Mond vor meine Lagerstätte.
Ich hob das Haupt, ich meinte erst, es sei
Der Reif der Frühe, was ich schimmern sah,
Dann aber wußte ich: der Mond, der Mond...
Und neigte das Gesicht zur Erde hin,
Und meine Heimat winkte mir von fern.

異郷の地にて

異郷の地に臥したるわれ。蒼白き光を
月はわが臥床のあたりに塗り込む。

頭あぐれば一曉を告ぐ^{はるか}灰光かと思ひしに

さあらし、わが肌^{はだ}に感ぜしは月なり、

月なりと思ひしかば

われ顔を伏せたり。

遙けき彼方より故郷^{ふるさと}われを瞬き招きたり。

三曲の歌詞を見ると、①の「神祕の笛」と③の「異郷の地にて」の原作者と原詩の判別は比較的容易である。「Li-Tai-Po」という表記からも、これが李白（李太白）を指していると見て間違いないだろう。實際、先行するいくつかの関連文献にも、この原作者を「李白」「李太白」としているものがある。さらに、原詩をかなり敷衍・改変していることは確かだが、この二つの詩の原詩を確定することも容易である。歌詞の内容から判断して、①は「春夜洛城聞笛」③は「靜夜思」であることは間違いない。

問題となるのは、②の「孤獨」の原作者と原詩である。

「Wang-Seng-Yu」なる人物が原作者としてあげられてはいるが、いったい誰であるのか、李白のようには容易に特定できない。現に日本語で著されているヴェーベルンの作品目録や作品全集のCDを管見した限りでは、この詩の原作者につ

「孤獨」の詩人（住谷）

いては、これも「Wang-Seng-Yu」とアルファベット表記するのみであり、李白のように漢字をもって表記されたものはない。誰を指しているのかは不明なところである。もちろん原詩についての確定もされていない。

原詩を確定するにあたって、原作者を特定する必要がある。手がかりとなるのは、もちろん作者名としてあげられている「Wang-Seng-Yu」なる表記である。本来ならば、原作者を特定するにあたって、古代から清朝までの膨大な数の詩人たちの中からこの表記に該当する詩人を調査して探さなければならぬ。しかし、実際にはその範囲を大幅に狭めることが可能である。というのも、「Wang-Seng-」なる表記から、これが「王僧」なる名前を持つ人物だろうということまでは容易に推測できるからである。さらに「王僧」という名を持つ人物は、實は中國の南北朝時代の史書の中に頻出するのである。従って調査の時代を南北朝に限定し、現存する南北朝時代の詩の中で「王僧」という名を持つ人の作品を調べるのが、最も効率よい方法であるといえるだろう。

そこで遠欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』を調査し、「王僧」なる名をもつ人物のうち、詩作を残している人を探し出してみることにした。その結果、次の四名が該当することがわかつ

た（括弧内のアルファベット表記はウェード式による）。

王僧達 (Wang Seng Ta)・「宋詩」卷六に五首收録

王僧祐 (Wang Seng Yu)・「齊詩」卷一に一首收録

王僧令 (Wang Seng Ling)・「齊詩」卷五に一首收録

王僧孺 (Wang Seng Ju)・「梁詩」卷十二に四十首收録

この中で、王僧祐がベトゲの表記する「Wang-Seng-Yu」という名前に完全に一致する。しかし、王僧祐の現存する詩はわずかに「贈王儉詩」一首のみである。「贈王儉詩」を見てみたところ、ベトゲの詩と一致する内容とは言い難く、さらにその出典は、『文選』や『玉臺新詠』のような、當時を代表的する詩文集ではなく、『南史』卷二十一王僧祐傳という史書なのである。當時のヨーロッパにおいて、このような出典の詩（および詩人）が知られていたとは考えにくいであろう。そこで彼を除外することにする。残る三人の中で、次に「Yu」に近い名前を持つ人物はというと、王僧孺が該当する。ウェード式で「Wang Seng Ju」と表記される王僧孺が、なぜベトゲの詩では「Wang-Seng-Yu」と表記されたのか。これは恐らく、ドイツ語では「Ju」と「Yu」の發

音が同じであることから、ドイツ語譯された時に、「Ju」から「Yu」に書き換えられてしまったことによるのである（この書き換によって、原作者の特定が難しくなってしまったといえるかもしれない）。ひとまず彼を「Wang-Seng-Yu」と比定して、現存する彼の詩四十首の中から、ベトゲの詩の内容と似ているものを採すことにする。

以上のような假定にもとづき、王僧孺の詩を検討してみた結果、問題となった「孤獨」の詩と近い内容をもつものは、彼の「秋閨怨」（『玉臺新詠』卷六所收）ではないかという結論を得た。⁽⁴⁾

王僧孺 (464—522)、字も僧孺。東海郟（山東省）の人。はじめ南朝の齊に仕え、王國左常侍で起家。以後齊および次の梁の時代、地方に派遣された皇族の幕僚や太守などの地方官を主に歴任し、梁の普通三年（522）に死去した。『梁書』卷三十三、『南史』卷五十九に傳がある。當時を代表する文學集團である齊の竟陵王蕭子良の西邸の集いに参加し、後、梁の武帝蕭衍の主宰する文學者の集いにも参加した。書籍の収集に熱心で、藏書の數は一萬卷余りにも達し、珍しい書籍も

多く含まれていたという。彼の文章は、そうした藏書などから得た珍しい典故が多く用いられ、當時の人からは「麗逸」〔梁書〕王僧孺傳より〕と評された。

この王僧孺の詩の中に、「秋閨怨」と題された作品がある。以下に本文と通釋・語釋とを併せて紹介する。

秋閨怨

王僧孺

- 1 斜光隱西壁 斜光 西壁に隠れ
- 2 暮雀上南枝 暮雀 南枝に上る
- 3 風來秋扇屏 風來たりて秋扇屏しりぞけられ
- 4 月出夜燈吹 月出でて夜燈吹かる
- 5 深心起百際 深心 百際むさに起り
- 6 遙淚非一垂 遙淚 一垂に非ず
- 7 徒勞妾辛苦 徒いたずらに勞す 妾が辛苦
- 8 終言君不知 終ついに言う 君は知らずと

(通釋)

- 1 夕暮れの光が西の壁に隠れ
- 2 暮れ方の雀が南の枝に集まり上る
- 3 秋の風が吹くと團扇は捨てられ

「孤獨」の詩人(住合)

- 4 月の光が出てくると夜の燈火は吹き消される
- 5 深い氣持ちがさまざまな折りに起こり
- 6 遠ざかってしまったあの人を想って流した涙は一度ではない
- 7 この苦しみを私はただただ煩うばかり
- 8 そして言う「あなたはご存じない」と

(語釋)

○風來秋扇屏―この句は、前漢の班婕妤作とされる樂府「怨歌行」の「新たに齊の紉素を裂けば、皎潔として霜雪の如し。裁ちて合歡の扇と爲せば、團團として明月に似る……常に恐る 秋節至り、涼風 炎熱を奪い、篋笥の中に棄捐せられ、恩情 中道に絶ゆるを」(李善注『文選』卷二十七所收)を典故に用い、寵愛を失った女性のことを暗に示している。班婕妤は前漢の成帝の宮女(「婕妤」は后妃の位)。最初成帝の後宮に入り、帝の寵愛を受けたが、後に帝の寵愛が趙飛燕姉妹に移ったのを知ると、自ら請うて太后づきの宮女として長信宮に下がった。成帝の死後、その園陵に移り住み、そこで死去したという。○深心百際起―吳聲歌曲「懊惱歌」其五「内心百際起、外形空殷勤」〔樂府詩集〕卷四十六「清商曲辭三」所收〕の表現を踏まえる。○遙淚―ここでは、自分のもとを去った男

性を想って流す涙のこと。

ヴェーベルンが歌曲で用いた、ベトゲの詩の原作者と原詩については、以上で確定できたと思われるが、最後に十九世紀後半から二十世紀初頭のヨーロッパにおける中國古典詩歌の受容のされ方の一例として、ベトゲの詩と王僧孺の原詩とを比較してみたい。

ベトゲの詩と王僧孺の詩（第四句以降）を比較すると、兩者に共通する要素は非常によく見てとれる。特に「月が出て燈火を消す」「遠くにある人を想って涙を流す」という原詩の基本設定は、ベトゲの詩においてもそれなりに守られているので、ベトゲの詩が王僧孺のこの詩をもとにしたと断定してはば間違いないであろう。

しかし、兩者において異なる要素もまた存在する。そのようなことが生じた原因の一つは、既に言われているように、ベトゲが原詩にない語句を加えたことによるものである。しかし、この詩に關するベトゲの詩では、面白いことに、逆に原詩の一部を省略したことによって、原詩になかった新しい要素が生じているのが見いだせるのである。

それは、原詩の第四句「月出夜燈吹」を巡って生じたベト

ゲの誤解である。この句は前句の「風來秋扇屏」と對句を形成しており、そのことによって、この句の本當に言おうとする意味が明確になるのである。具體的に言いかえるならば、班婕妤の「怨歌行」踏まえた「風來…」の前句と對偶を形成することによって、後句の「月出…」の意味するところも、前句に對應するものであることが明らかにするのである。こうした對句の機能によって、この一聯全體は、「寵愛を失った女性」を比喻していることが理解できるようになっている。しかしベトゲの解釋では、原詩の第三句以前を省略してしまつたために、こうした比喻を読みとれていない（もちろん、班婕妤の典故を知らなかったということが大きいのだろう）。この結果、第四句の解釋も「燈火を吹き消すと孤獨な想いに胸が塞ぐ」という、王僧孺の原詩に無い新しい趣を持つものに作り變えられてしまったのである。そこに詠われているのは、もはや原詩のように棄婦の嘆きに限定された孤獨感ではない。より抽象的な孤獨感が詠われた、全く別の詩境にと變貌を逐げてしまっている。

こうしたベトゲら十九・二十世紀初頭のヨーロッパ人による中國古典詩歌の解釋（誤解）や變容という現象は、いかに

して生じたものであるのだろうか。結論を先に言えば、彼らの求めていた「中國」というものが、現實に存在する／した中國を反映したものではなく、あくまで未知の、遠く遙かな世界のイメージの反映であったことによるといえる。こうしたオリエンタリズムの風潮が、世紀轉換期のヨーロッパで大いに流行し、同時期のさまざまな藝術分野においても反映されていることはよく知られている。そしてそれは、音楽の分野においても例外ではなかった。例えばフランスの作曲家クロード・ドビュッシー (Claude Debussy 1862—1918) や、モリス・ラヴェル (Maurice Ravel 1875—1937) の作品には、そうしたオリエンタリズム要素を持った作品がいくつも見られる。ドビュッシーのピアノ曲集《版畫》(1903) 第1曲「パゴダ」やラヴェルの歌曲集《シェエラザード》(1903) 第1曲「アジア」などは、その代表例といってよいだろう。そこに描かれるのは現實にある具體的な存在としての東洋ではない。西アジアからインド・中國などが渾然一體となった、想像された世界としての東洋が描かれているのである。實際、「旅行を自分のために奮發してやる手段のない時には、想像力によってそれを補わなければならないのです」(《版畫》に關するドビュッシーのコメント) や、「…ペルシャ、インド、そ

「孤獨」の詩人 (住谷)

して中國、日傘をさした太った中國の役人、繊細な手をした姫が見たい。そして、詩や美について激しく議論する學者が見たい：」(《シェエラザード》「アジア」の歌詞より) などという言葉は、そのことを端的に示している。またこれより時代は下るが、架空の古代中國を舞臺に、冷酷な姫君トゥーランドットとタタールの王子カラフの戀愛を描いた、ジャコモ・プッチーニ (Giacomo Puccini 1858—1924) の歌劇《トゥーランドット》(1921—1924) も、そうしたオリエンタリズム的特徴を多分に含んだ作品といえる。もちろん、既に取り上げたベトゲの『中國の笛』や、マラーの《大地の歌》もこうした風潮と無縁のものではないのである。

當時のヨーロッパ人による、このような中國を含む東洋への關心・受容・理解について、誤解と歪曲と見なすことは容易であるし、それを否定することもできないであろう。しかし、問題はそれだけにとどまらない。このような學問的には正確さを缺いた、東洋に對する誤解や歪曲が存在することによって、上述したような新しい文化が、當時のヨーロッパで生み出されたことも事實であるからである。また、既にエドワード・サイード (Edward W. Said 1935—2003) が『オリエンタリズム』(1978) の中で指摘しているように、東洋に觸

中國文學研究 第二十九期

發されて生み出されたこのような文化が、當時のヨーロッパ列強の押し進める帝國主義政策・植民地支配と相互に補完しあうかたちで、より強固なディスクールを形成し、現代にまで影響を及ぼしているということも忘れるわけにはいかないであろう。

さて、ヴェーベルンの作品についてはどうであろうか。既に無調の作風に入った時期に書かれたヴェーベルンのこれらの歌曲は、耳で聴く限りでは、マーラーの作品のように、五音階を用いて東洋風な雰囲気であらわすというようなあからさまな手法は見られない。そこでは、従来の機能と聲にとらわれない抽象的な音の世界が、あたかも時代や歴史とは隔絶しつつ繰り広げられているかのようである。しかし、歌詞として採用されたベトゲの詩によって、そのような作品もまた同時代の文化的特質を密かに反映していることを示しているのである。

注

(1) この小論を書くにあたって、以下のCD全集を主に参照した。

① P・ブレーズ／ヴェーベルン全集（作品1〜31）：CBS

SONY 00DC973-6

② ヴェーベルン・コンプリート・エディション：DG POCG 10262/7

(2) 『中國の笛』の制作事情については、濱尾房子「マーラーの『大地の歌』と『陶器の亭』」〔音楽藝術〕四七卷一一號、一九八九年一月）を参照した。

(3) (注2) 所掲の論文によって、長らく原詩が不明であった、『大地の歌』第三樂章「青春について」の原詩が明らかにされた。同論文によれば、これは李白の五言律詩「宴陶家亭子」にもとづいたものであるという。歌詞の中の「緑と白の陶器の亭」という語が、李白のどの詩の詩句に該当するかが不明であったのだが、これは、「陶家の亭子」という詩題を、ジュディット・グティエが誤譯したことから来るものであり、ハイルマン、ベトゲの詩集にまでそのまま受け継がれてしまったというのである。

(4) 王僧孺をはじめ、『玉臺新詠』に收録されている六朝の詩人たちの作品は、李白などの唐代の詩人たちに比べて、一般的な知名度の點で遙かに及ばない。このことも、原作者が特定されにくかった原因の一つではなからうか。

* この小論は、早稲田大學COEアジア地域文化エンハンシング研究センターの研究成果の一環として制作されたものである。